

出しゅじ塞さい王昌齡おうしょうれい

秦時名月漢時關

秦時の名月漢時の関かん

萬里長征人未還

万里に長征して人未だ還らずかえ

但使龍城飛將在

但だ龍城の飛將をして在らしめばあ

不教胡馬度陰山

胡馬をして陰山を度らしめばいんざん

秦の時代にも照っていた明月、漢の時代から置かれていた関所。

万里の遠くへ長征した兵士たちはまだ故国へ帰れない。

もし漢代に龍城の飛將軍とおそれられた李將軍のような名將がいたならば敵の騎兵に陰山山脈をこえて侵入されることもないだろうに。

《出塞》 辺境守備の任にあたる出征兵士をうたう楽府題。この詩を「従軍行其の三」と題する本もある。

《長征》 遠い辺境へ出征すること。

《但使》 仮定の辞。もし……すれば。

《龍城》 匈奴の根拠地。

《飛將》 漢代の名將李公のこと。

《教》 使役をあらわす語。……に……させる。

《胡馬》 胡は北方の異民族。その馬で敵兵を意味する。

《陰山》 現在の内蒙古自治区の中部を東西に横たわる大山脈。

唐時代には辺境での戦いに従事する兵士やその家族を題材にした、いわゆる「辺塞詩」が数多くつくられ、本欄でも王翰「涼州詞」・王之涣「涼州詩」などを取り上げました。辺塞詩のほとんどは当代のこととしてではなく、漢時代の過去の状況を設定して作詩されました。しかしこの詩は当時実際に北方異民族の脅威があり、朝廷の施策が十分な効果をあげていない状態だったようで、それに対する諷刺の意味を込めて作られたと思われます。

いつの時代でも国民を戦地に送るかどうかという為政者の見識と判断は重大な問題です。また優秀な將軍のもとではやく戦い終えて故郷に帰りたいというのが、兵士たちの切実な願いで、作者王昌齡は名將の出現と辺境問題を終息を切望する心情を描いています。しかし、王昌齡は江寧（現在の南京）の進士で政治家でした。現在の体制批判とも受け取られかねない内容の詩なので、当代の事としてではなく、漢時代約八百年前の過去に状況を設定して作詩しています。

この詩は、唐詩選の撰者李攀竜が唐詩中の最高傑作と絶賛しています。とくに最初の「秦時の明月 漢時の関」は絶唱とされていますが、現代に生きる我々にもグッとくる重い句です。いつの時代でも誰もが戦争がない世の中を望んでいても、それでもどこかで戦争は続いています。この詩から、私は自衛隊の南スーダン派遣を連想してしまいました。戦争に行くわけではないものの、日本の国際平和維持活動はまだ議論の余地がありそうです。

ちなみに王昌齡は安祿山の乱のとき、混乱にまぎれて勝手に故郷に帰ったため刺吏閻丘暁に殺されました。

参考文献・唐詩鑑賞辞典（東京堂出版）・唐詩選（岩波書店）・漢詩の辞典（大修館書店）

西行一千里 暝色寒樹に生じ 暗に歌吹の声を聞く 知る是長安の路

西行一千里 暝色寒樹に生じ 暗に歌吹の声を聞く 知る是長安の路

《大意》 旅して西行すること一千里、寒々とした町の木々が夕暮れ色に染まっている。暗やみの中から賑やかな都の歌声と演奏が聞こえてきた。そうか長安の城下に到達したのだ。(儲光義詩・長安道)

胡風は朔雪を吹き 千里 竜山を渡る

胡風吹朔雪 千里度龍山

鮑照詩一節 学劉公幹体

胡風吹朔雪 千里度龍山

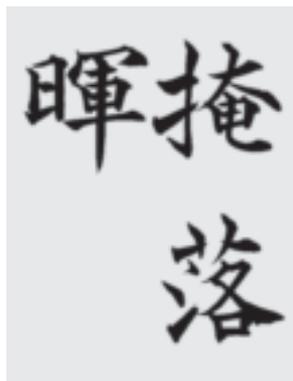
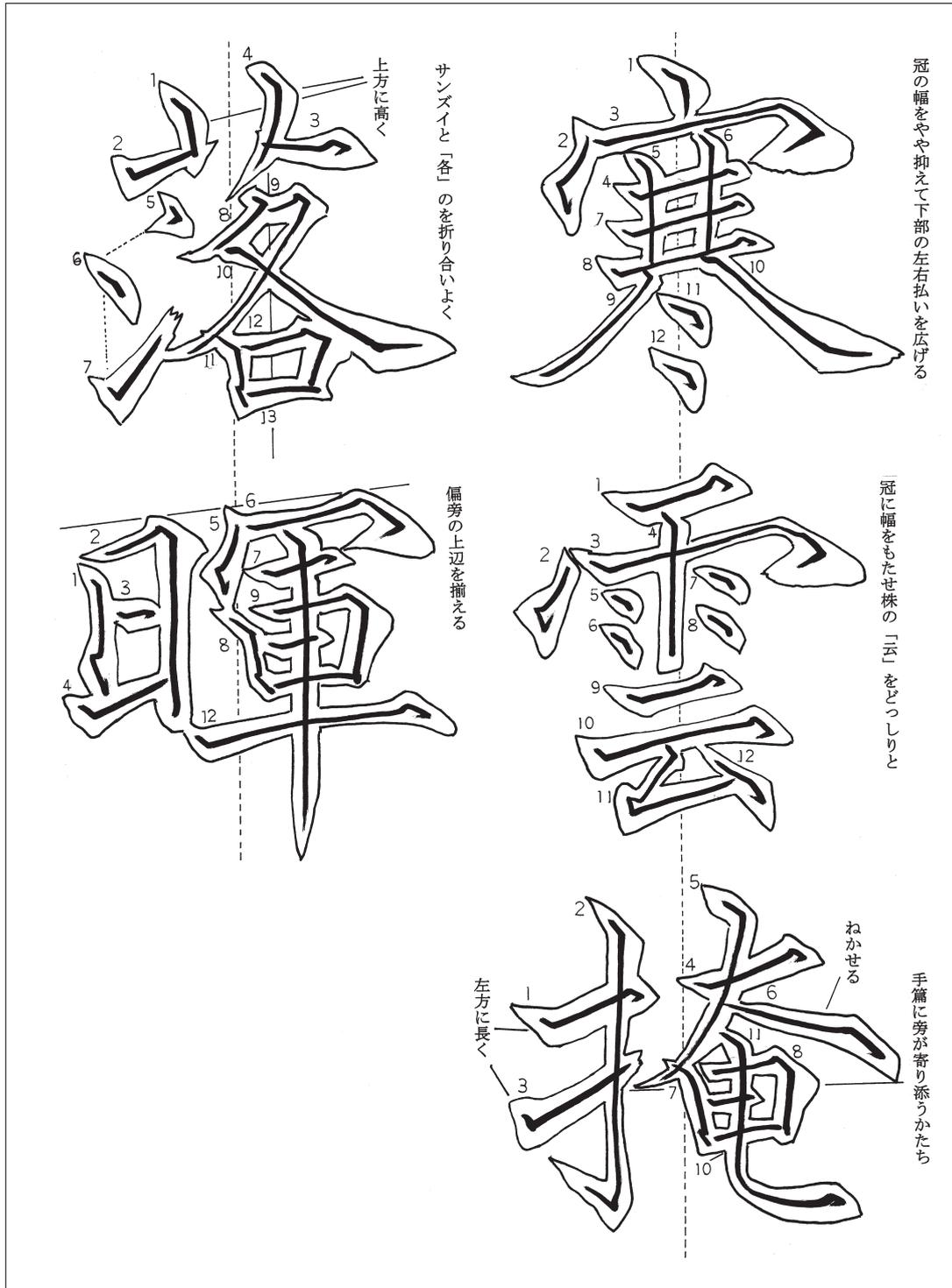
鮑照詩一節 学劉公幹体

《大意》 遠く胡の地に起こった風は、北方の雪を吹き散らして、千里の彼方あの凍てついた竜山をも越えて吹き寄せてくる。(鮑照詩一節・学劉公幹体)

読み  
寒雲落暉を掩うかんうんらくき  
（冬の寒げに見える雲が夕日の影をとざしている・元圃）

寒雲掩  
落暉

佐藤象雲書



一般部規定課題出品について

- ・規定課題は段級の区別なく、右掲載の五字句となります。
- ・初段以下の方に限り、左に掲載してあるように二文字または三文字でも構いません。
- ・規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

草書

行書

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

寒雲掩 落暉

寒雲掩 落暉

次号課題

隸書

郷心新 歳切

寒雲掩 落暉

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

支 部	遠山に日のあたりたる	順 位	氏 名
		桔野かな	

高濱 虚子

和泉 溪石 先生書



佐藤 象雲 書

音

シヤクヘキヒホウ  
スインシキヨウ

略解

一寸ほどの玉は稀ではあるが決して尊いものではない。  
一寸の光陰を大切にすることこそが本当の宝といふべきである。

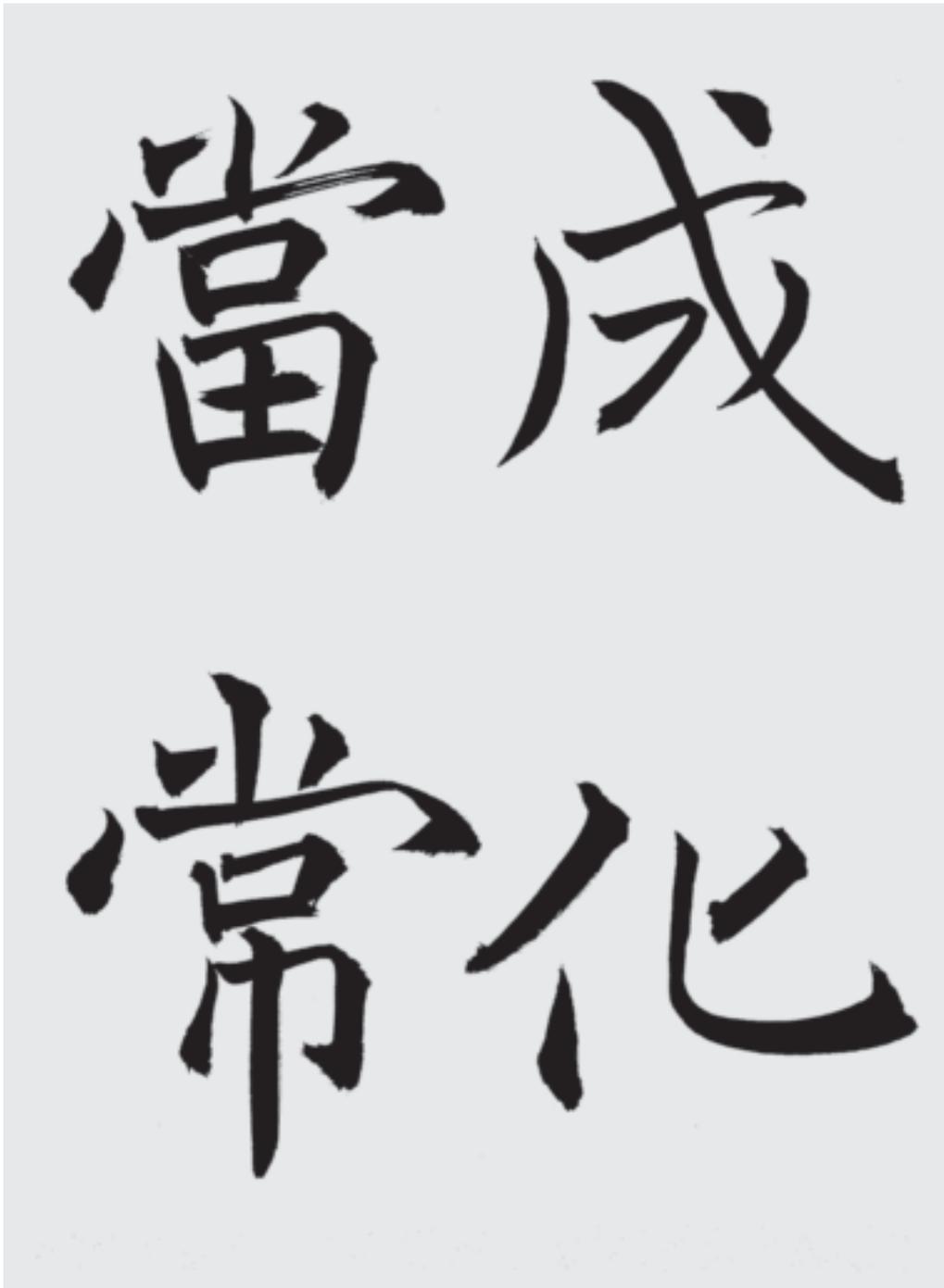
成化當常

化を成し當常……

■ 褚遂良・雁塔聖教序

(初唐・西曆六五三年) の臨書 (33)

象雲臨



『成化當常』

前回は間架結構法について解説しました。これは一般的に楷書を分間布白とか均間という法則で点画の間合いを整えて書くという側面だけで捉えがちです。しかし楷書が書法的に頂点に到達したといわれる初唐の三大家（歐陽詢・虞世南・褚遂良）の楷書の古典を仔細に観察すると、実際には、前後の文字の関係をなどを考慮して様々な変化があることが分かります。今月の課題から各字の変化を見てください。

「成」戈法に交わる横画は右上がりに書くことは結構法の鉄則。第一画を立てて左側に壁を設けて、戈法を暢びやかにして右方向に空間を開放している。

「化」四画全てが細線ながら、力を内包して強い線で構成されていることに留意。

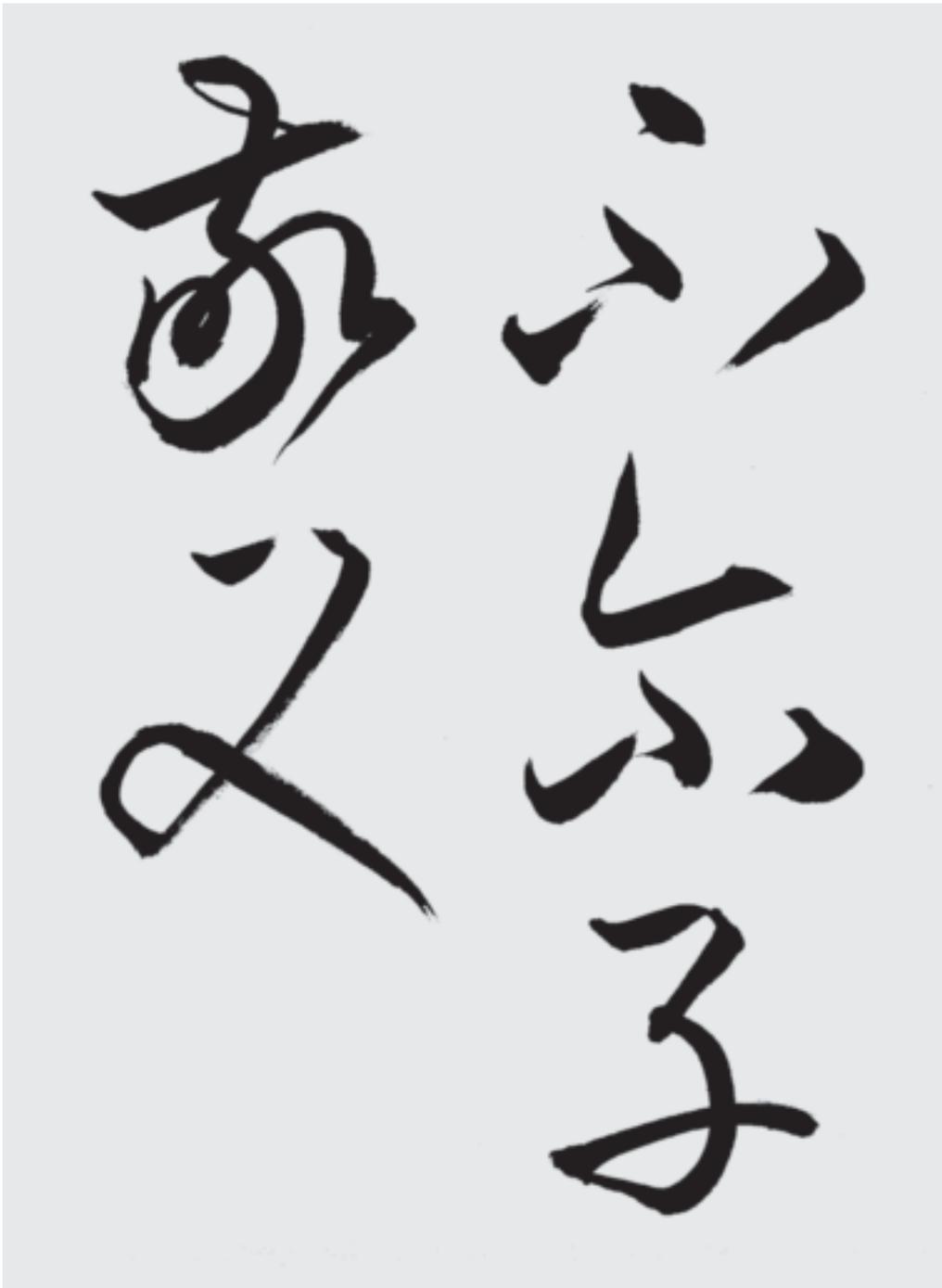
「當・常」冠の全ての点画が変化して同じではない。また、このように重畳する字は上下の中心が、次第に右に移動している。無理にシンメトリカルにしないことが大切。

ふふ子ふふ子

爾しからずと、子敬又(答う)

■孫過庭・書譜(初唐・西暦六八七年)の臨書(15)

象雲臨



『不爾子敬又』

今月は巻頭で「空海」を特集しました。空海は入唐したときに、この孫過庭の書譜を学んでおり、空海の臨書と思われる御物本(皇室の所有)と陽明文庫本の二つの作品が現存しています。空海の「七祖賛」の筆跡は特に御物本の筆跡と類似していて、また風信帖の肥瘦濃淡の調子も、空海が書いた書譜の臨書に近いといわれています。

書譜は伝統的な儒教道徳に基づいた書論で、王羲之崇拜者だった太宗の影響も多分に感じさせ、王羲之尊崇の理念が基調となっています。空海は書譜を書道の理論としても併せて学んだことが容易に想像され、帰国後の空海の書に多大な影響をもたらしていると思われるます。

千三百年前に書かれた書譜の真蹟は現在、台北故宮博物院に保管され、それを学んだ空海の千二百年以上前に書かれた臨書作品が日本に現存していることとなります。なんかワクワクしませんか。